

開高健読書会だより

【第48回読書会】2019年8月25日(日) 紙上参加含め10名の出席

開高の没後2年の1991年の「新潮」12月号に発表された谷沢永一の「回想 開高健」を読んだ。昭和25年の出会いから開高の死まで、およそ40年に及ぶ交流を書き綴り、作家開高健の優れた評伝になっている。谷沢は出逢った時から、何が何でも自分固有の小説を書こうとする、その言葉は殆ど自家製であり剥き身の語彙で表現に執念を燃やす開高に、自分に無いクリエイティブな美質を見抜き、優れた作家になると確信して応援しようと思った。開高が貧しかった時、無制限に蔵書を貸し与え、文壇デビューすることを我がごとのように喜び、生涯を通して開高の書いたものが散逸しないように心を配った。一方文壇にデビューした開高は、批評家としての谷沢の活躍の場をさりげなく文壇に用意した。谷沢は自分の存在を振り返った時、開高との同行二人、それが自分の存在理由であり、傑出した男から深く厚く信頼されてこれ以上の喜びはないと語っている。青春と文学の真ただ中で出逢った二人は、それぞれが相手を理解し、刺激し合った密度の濃い交流であった。そして身近なところで一人の作家開高健を見つけた谷沢ならではの、開高のひとりとなりについて、例えば早すぎた七歳年上の牧羊子との結婚や道子の誕生の経緯、開高の気質や対人関係などについても書かれているので、読書会では、その方面の話でも盛り上がった。

【第49回読書会】2019年9月28日(日) 紙上参加含め10名の出席

1965年(S40)の「新潮」7月号に発表された「兵士の報酬」を読んだ。1964年11月に朝日新聞社臨時海外特派員としてベトナムに行き、ジャングルでの激しい掃討作戦に同行し、ベトコンの奇襲と猛反撃を受けて、200名の内17名が生き残った作者である「私」と、戦友のような関係のアメリカ軍曹長ウェストモアランドの「報酬」であるサイゴンでの3日間の休暇を描いている。私は「アジアの戦争を見届けたい」という動機があってやって来たものの、「生き残ったことが偶然でしかない」ほどの死ぬような思いをして、第三者でしかない自分が、何故ここにいるのか何故東京に記事を送るのかと存在理由を自問する。一方曹長は歴戦の経験を持ち、上官の前でも仲間の前でも平気で「この戦争は結局のところベトコンの勝だ」「戦争に勝者なんていねえのよ」と言い放つほどの男だが、奇襲を受けたジャングル戦で傷ついた仲間を見捨てて来たこと、そこで踏みとどまって戦わなかったことに自責の念に駆られていて、「俺は卑怯だった、義務を果たさなかった」と、あんなに楽しみにしていた休暇を一日早く切り上げて砦に帰って行く。国家の大義である共産主義から民主主義を守る義務の為に、「墓場」になるかもしれない所に、人を殺すために彼は帰って行く。亜熱帯の素晴らしい自然描写をまじえながら、ベトナムでの戦争の実態を、開高は経験したからこそ書くことの出来た作品であり、ウェストモアランド曹長を通して戦争への懐疑否定を語っている。

【第50回読書会】2019年11月2日(土) 紙上参加含め9名の出席

1950年4月の「市大文芸第3号」に書かれた「印象生活」に続く2作目の作品「乞食の慈善」を読んだ。ストーリーは冬の夕暮れ時に、積み荷を満載した荷馬車が坂道で深いぬかるみに車輪の半ばまで埋まってしまう、若い車夫が悪戦苦闘するが尿意を覚え、手綱を離して道端へ歩みかけた時乞食が現れ、車夫と乞食と馬が一体となって重い頑丈な車体を持ち上げようとするがうまくいかず、車夫は乞食に自分の家から援け手を連れて来てくれと頼む。乞食は百姓家に駆け出し、荷馬車の切羽詰まった事態を老爺に告げたのに、「嘘、吐くでねえばや」と、その

外観から蔑まれ信用されなかった。乞食は、老爺に対し怒りや絶望、憎しみや寂しさを感じあきらめて戻ろうとしかけたが、「おれが、奴の名を知っていてもか」と言った時、この言葉で乞食は老爺に対して圧倒的優位に立つ。乞食と老爺の心理、感情のせめぎあい、その変化の切迫した場面描写がこの小説のクライマックスである。車の下で意識も薄れかけ死に瀕していた車夫は、助けが来たことで月光の路上に這い出すことが出来た。乞食は死にかけていた息子の恩人なのに、人は外観で判断してしまう愚かさを表現している。

この小説を読むのに何冊もの辞書を必要としたと言うほど、難しい漢字や熟語の多用、更に辞書にない造語を使用し、何が何でも自分の文体を持つとした開高の気負いや初々しさが感じられると同時に、若さゆえにこなれていない、奇をてらった表現、間違った表現や必要以上の形容詞の多用などが見られ、内容は面白いが文章は習作であり、開高にこのような作品があることが、逆に興味深かった。最後の「これが、この話の云々」は、正に蛇足である。

【第51回読書会】2019年11月29日(金) 紙上参加含め9名の出席

1950年5月の旧制大阪高校文芸愛好家の同人誌「白楊」2号に書かれた「愛と翳」を読んだ。

ストーリーは、作者と思われる思春期の青年が、苛烈に孤独な自己否定や自意識過剰の内面に疲れ、孤独で愛に飢え鬱々とした日々を送っていた時、全てが自分と反対の、穢れの無い生の息吹をもった一人の美少年に魅かれ、彼への感傷の世界に浸る。しかしこの同性愛的な心情を深く推し進めることなく、彼への思慕の情に自分が「蝕まれ」「束縛」されていることを意識するようになる。そして彼への思いから自由になる為に、彼を残酷に否定して、自分を取り戻して再び孤独な世界に戻って行く。思春期の性の在り様として、同性愛的な感情を書くことに、19歳の開高に躊躇いがあつたのだろうか。一読しても文章の意味が理解出来ない所が多々あり、よく分からん、難解、読書会だから最後まで読み通したが、一人で読んでいたら途中で放棄したであろうなどの意見があり、言葉、文章をもっと推敲する余地はある。しかし後年の開高文学にみられるような素晴らしい情景描写や心理描写、フランス語や英語をまじえた巧みな表現もあり、19歳でこれだけ書けることに感嘆の声があがった。

文責 西野小枝子

〈開高健作品読書会の開催につきまして〉

新型コロナウイルスによる感染症の影響を考慮して、桃ヶ池公園市民活動センターでの対面形式による開催は見合わせておりますが、オンライン読書会を月1回程度開催しております。

●オンライン読書会(ZOOM使用)

日時/月1回程度

時間/午後1時30分~午後4時予定

内容/毎回とりあげた開高健作品についての感想を話し合います。ざっくばらん、楽しい時間です。ご自由にご参加ください。

お問合せ/開高健関西悠々会事務局 酒井

MAIL:kansaiikaiko@gmail.com

FAX:06-6605-2088

※ご参加ご希望の方は

読書会担当・吉村メールアドレス(naokiy@m3.kcn.ne.jp)までご連絡ください。



Ken Kaiko

開高健関西悠々会

□設立呼びかけ人

難波利三、眉村卓、玉岡かおる(以上作家)、藤本統紀子(シャンソン歌手、エッセイスト)、コシノヒロコ(ファッションデザイナー)、小林哲也(近畿日本鉄道取締役)、山中諄(南海電気鉄道特別顧問)、鳥井信吾(サントリーホールディングス代表取締役副会長)、寺田千代乃(アートコーポレーション社長)、山本壯太(古典の日推進委員会ゼネラルマネージャー)、西澤良記(公立大学法人大阪理事長)、作花清夫(京都大学名誉教授・天中五十期会会長)
(敬称略・順不同)

□お申込み・お問合せ

開高健関西悠々会事務局

mail:kansaiikaiko@gmail.com

fax:06-6605-2088

〒558-8585

大阪市住吉区杉本3-3-138

大阪市立大学 有恒会内